

斗K-26

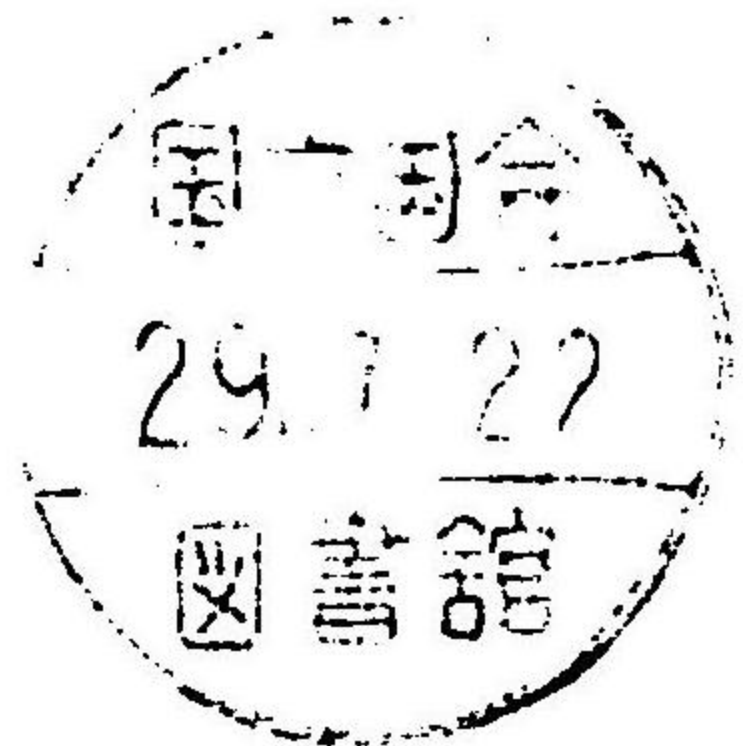
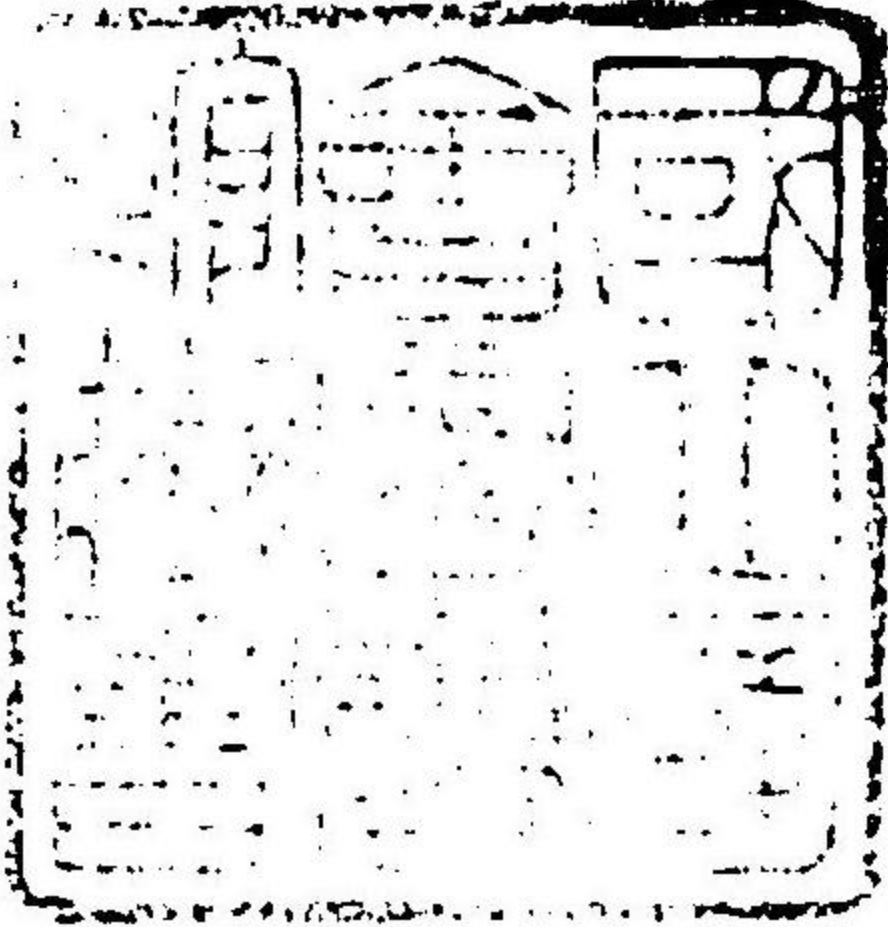
912.4

T:238.83

最明寺殿百人上臈

近松町左衛門作
武藏屋花版

91247:23



336877

最明寺殿百人上臈

近松門左衛門作

元禄十六年三月四日初興行、作者五十一歳

周書に曰く國と治むるに三常あり、一ツには君賢と舉ると以て常とし、二ツには官賢に任ずると以て常とし、士賢と敬ふと以て常とし、合て三ツの鱗形北條五代の鎌倉や、時の時たる時頼の執權の代ぞ私なき徳と隠して權貴に誇らず、祝髮して最明寺殿道崇と號し、名越が谷の法華堂に古右大將頼朝卿の尊影と木像に刻み奉つり、大江の僧正廣辨と別當に請じすは、莊嚴禮典在すが如く神易と名付六十四本の御圖と込め、凡國家の政道に誤り有や無しやとて、我身と御圖に試みて正たまへる賞罰に、天地自然に偽りの無き世なりけり村時雨、冬至の日と吉例にて翌年の政所始め、御嫡子天女丸時宗十六歳、御舍弟式部の冠者時定廿三歳、其外連署昵近の歴々法華堂に群參あり、錦の戸帳開れば各々はつと頭と垂れ生るに仕る如くなり、大江の僧正太祝たてまつり、御圖の御箱押敷いて千早振、正直正路の御圖の文讀上げてこそ講じけれ、夫千里の地と得るは一賢人と得るには如す、千金と進ぬるは一賢人と求るには若すと云々、此文の意は假令は大國と隨へ万寶と求めんと思

最明寺殿百人上臈

最明寺殿百人上臈

は、先臣下の賢者と求むべしとの御知せ目出度御聞候と、考へらるれば最明寺殿聞給ひ、我も兼て存する所、臣等が心君の冥慮に相叶へり、然らば建曆以來御勘氣謀犯の輩の上り屋敷の明地多し、當代忠勤の方々へ分ち與へんそれくと、中原の大外記執筆にて仰に從ひ記しける、先切通しの梶原屋敷は海と見晴し山に添ひ境内分に過たれ共宇都宮の新庄司友平に恩賜ある、之はこれ父友綱が梶原と射留たる舊功、且は其身も學問好み記録と集め文武の嗜み行跡道と守るよし、外を勵まし徳と勤むる御褒美として、向後若君天女丸殿御師範にこそさしけれ、葛西が谷の佐々木屋敷も此佐々木兄弟は、高名諸人にぞつはすと雖も、譏者の爲に没收せられし分地なれば先祖の忠節御感に堪ず、佐々木の十藏廣綱に給けるは故郷に飾る唐錦、さぬばり山の文覺屋敷遠藤四郎に給まはる所、天輪の盛長屋敷は結城の友重、妹背川の浦殿屋敷は稻毛の彌五郎雪の下の長明屋敷、當代和歌に名と得たる河内守光行が光源氏の講釋場、今ど風雅の道までも色と上たる紅が谷、佐野の源左衛門常世が屋敷は花すさ者の跡とて若君の御花畑御休息所に給てげり、筋違橋の秩父屋敷赤橋左衛門所望の所、比企が谷の土佐坊屋敷は金田の頼次、松葉が谷の佐竹屋敷は城之助保

盛、藤が谷の大伴屋敷兼て足利望みに應ず、天神山の荏柄屋敷は仁科の前司、小林郷の朝比奈屋敷、伊井嶋の景政屋敷三浦の光村泰村に給つたり、袖の浦の靜屋敷月影の大佛屋敷稻村崎の大介屋敷は平の宣時秀時、安藤左衛門光成其外より、二男まで分に應じ功に依り住宅の地と安堵ある、實に廉直の法政やと各々隨ひ靡さける、最明寺殿悦び給ひ如何に天女丸來春よりは汝とも政道の連署に加ふべし御影に御禮仕まつれ、畏まつて引緒ひ寶前に差向へばぞつと身の毛もいよだつて忍辱柔和の佛眼も、睨ませ給ふと御影の御顔二目とも拜せられず、頭の上に大盤石の落り、つたる如くにて、眼も暗み俯伏にうつばと伏し給ふ、人々周章抱退け看病すれば氣も爽やき、顔色もとの如くにて不思議くと言なり、最明寺殿驚き給ひ扱は神君の御内性に叶はぬと覺たり御園に伺ひ奉つれと、僧正やがて神咒と唱へ御箱と振上振立て御園の文と拜誦あれば、豆と煮て豆の豆殼と焚く煙たぬざるごと日月の千回と讀も終らずあらず不思議や、此文は兄弟の中不和にして恨みありとの御示現、此に付て愚僧常々考へ置しに疑ひなく、天女丸殿こそは九郎判官義經の再誕候、其所謂は判官殿は丁丑の生れ本御師の封に當つて軍術に妙と得、中秋なるばの誕生敵と征する懸官

最明寺殿百人上臈

最明寺殿百人上臈

向齒そつて猿眼びんの髪かみの縮ちぢしとや、若君わがぎみの本卦支干御誕生ねんげつしかんごたんじやうの年月刻限ねんげつこくげん面腫骨柄寸分相違おもてはれこつがらすんぶんさうばいなき上に只今御影ごかげいの御怒彼是ごんげかぜ以て考かんがれば、若君わがぎみの前生ぜんじやうは義經ぎけいに極きまつたり、尙其なほその驗しやくしするに御覽ごらんじ合あすべしと、三世命鑑理さんせいめいかんりと照てらし鏡かがみに懸かけて説給とまへば思おもひ合あせて人々ひとはあつと手てと打ち給うちたまひり、僧正そうじやう重ねて承うけたまはれば奥州おくしゆの田夫者でんふしや、鎌倉殿かまくらどのの御勘氣ごかんきと謀犯めくわん人ひとよなんどとて、義經ぎけいの御墓ごぼと馬うまの飼場かひばと陥荒ふみあらし、利きさへ頼朝公よりともこうより錦戸にしんごに給たまはりし判官はんくわん謀罰めくわんの御判ごはんの御教ごけう書國中しやくこくちゆうに口くちすさみ御ごらばねと辱はづかしむ、早く御使者ごししやと遣つかはせ彼かの御判ごはんと燒やき捨て、おん墓ぼと清きよめ尋たづみなば御勘當ごかんたうのしるしも失うせ判官殿はんくわんどのの魂魄こんぱくに天然自在てんぜんじざいの御威光ごゐくわう、いざ若君わがぎみの御身ごみに顯あれ智謀ちぼう計略けいりやく軍術ぐんじゆつ劍術けんじゆつ輕業けいごふ早業さうごふ、武勇ぶゆうの達者たつしやと成給なりたまはん、其時そのときこゝ義經ぎけいの生變なまればりと著しやくるく、愚僧ぐそうが縁ゆかりたる命鑑めいかんの易ひき、おん疑うたがひも暗申くらまさんと、見通みとおすごとく陳のらるれば實じつにくく左様さやうの例たひし多おほし、然しからば二階堂にかいだう入道にようだうは奥州おくしゆに下向げかうし、義經ぎけいの御墓ごぼと祭まつり同おなじく誅罰ちゆうばつの御教書ごけいしよも召返めしかへして燒捨やきすつべしと仰おほせと受うけてぞ退出たいしゆつす、斯かて最明寺殿さいめいじでん御影ごかげいの前に進すすみ出いで、扱方さくた々に申渡まうしたす仔細さいじゆ有あり、近ちかか寄よりて聞候きこへ、抑我おさわが先祖せんぞ北條きたじやうの四郎時政しじやうじまより、義時ぎじ泰時たゐじ打續うちつづき六十餘州よじゆしゆの執權しやくけんいざ此御影このみかげいの照覽せうらんに懸かけて政道せいだう私わたくししなしと雖いへども、遠國えんこく波濤なとうの末々すくなくた民たみの盛衰せいさい、國

主ぬしの邪正じやせいは見るに難たがく聞きこと遠とほし、唐土たうどの大祖皇帝たいそくわうていは、感王かんわう道だうに御御幸ごごきやうのためしもあり、頭陀修行だうたじゆぎやうの身みともなり諸國しよこくの安危あんきと見みを欲ほしく思おもへども、斯かと世上せじやうに披露ひろうせば、諸人しよじん偽いつはりりて誑せうの善惡ぜんあくしり難たがし、されば此方丈このほうじやうの床ゆかとしつらふ事餘ことよの儀ぎにあらず、上宮太子じやうきやうたいしの身みは夢殿ゆめどのにありながら、魂たましひは震旦しんたんの天臺山てんたいざんに逍遙せうぎやうあり、我われも年月としづき學まなびたる坐禪ざぜん三昧さんまいの力ちからに依よて、此方丈このほうじやうに閉籠へいろうり觀念くわんねんと疑うたがし、身みは鎌倉かまくらの法華堂ほつげだう、一心しんは秋津洲あきつしゆの浦々うらうら里々りり巡見めぐみすべし、其間そのあひだは弟あにの式部しきぶの冠者くわんじや、天女丸てんによまると心こころと合せ、貞永あやふねの式目しきめと守まもつて政道せいだう怠たるべからず、僧正そうじやうの外ほか此所案内このところあんない禁制きんせい、坐禪ざぜんおほりて僧正そうじやうの便次第べんしだいに迎むかひに來きれ、追付おいつ目出度めだて對面たいめんせんと禪場ぜんじやうの戸かどと引立ひきたてているさの月の影つぎのかげ暗くらく寂寞せきぼくとして音ねもなし、若君わがぎみと始はじめめ諸大名しよだいめい國家こくがの爲ためとある上うへは兎角とかくやわけ難たがし、去さながら給仕あづかへ申者まうしもなし万事ばんじ貴僧きそうと頼たのみ存ぞんじ候まうと、始終しじゆうの約束やくそくと皆々みなみな本所ほんじよに歸かへらるゝ、兼かねて僧正そうじやう只一人ただひとりに示しめし置給おきたふもゑ、旅たびの物ものの具取ぐとまのなひ何れも歸宅きたく候まうてはや夕霧ゆふぎりの暗紛くらまれ御旅立ごたびだちあれのしと、訪問かんとんれ給たまへばあら嬉うれしや數年すうねんの望のぞみ達たしたり、來年らいねん彌生やよひ末すえつゝた立歸たちかへるまでは我われ此許このこゝにありと沙汰さたし給たまへやと内うちより扉押開ひらく、花はなの袂たもとと旅衣たびころも笠かさより外ほかは宿やどりなく、苦くと致いたはなすのひら包つつみ金軸きんじやくの普門品ふもんひん、したんのさすが矢

最明寺殿百人上臈

最明寺殿百人上臈

六

立の筆百八の菩提珠ならで、御身に添る物はなし慈清法師が世と遁れ、修行の肩に懸たるはやさしき島の歌袋、此は浮世の人心ゆがみと矯て竹の杖、月諸共に我も又世上の闇と照さんど、慈悲の眼の衣手や民の草葉に響れ給ふ御有様ぞ有難き大學の道明徳と明るに生民と受し天女丸御同學には佐々木が嫡子花市、土肥の乙鶴金子の十九皆物韻の御伽にて、朝は武藝定つて、晝の時計と宇都宮の屋敷に通ひ給ひける、今日のお供は上野の國の住人佐野の源藤太経景、若君の御出なりと案内す、友平立出で學問所へ伴なひ参らすれば、若君と始め何れも行儀繕ひて、面々書物ひらへらる、友平若君と情々と打守り、扱々御器用千萬誠の聰明睿智とは若君の御事、夫に依て御伽の子供衆まで我劣らじと覺え強く、小學入り日數もあきりに四書古文三昧詩、錦繪段此上に遊ばされんは五經文選其外聖賢の經書詩文の書、限りなく候へ共夫までに及ばず、弓馬の家には孫子吳子三略六韜司馬法などやして、合戦勝負の理非と述べたり、七書と能々御得心あり、兼ては史記と御覽あり古人の心と味入と、弓矢採る身の學問とはやなれ、大江の僧 正 廣辨が三世命鑑と考へ九郎判官義經の生れ變りとやされしに夢く疑ひ候はず、末頼もしき御器量いよく文武の御嗜みこそ

肝要なれ、夫に付て先物讀みの始めには、實語教童子效和漢朗詠菅家往來、扱は判官殿の腰越狀お家の式目、是等は諸人存じの書、茲に未だ流布せざる秘傳の一卷、是と御傳授致さんと篋笥の底より取出し、是は君の前生判官殿 高館にて御生害の時一期の遺恨と書頭し口に合んで失給ひし合狀とすもの、文法やはらうに候へ共無點の物に候へば、一遍教へ奉つらんと押開けば天女丸、扱は我生れぬ先の筆跡のと、見ぬ世の昔なつかしく涙と聲に浮べながら同音にこそ讀れけれ

義經ふくみ狀

抑々義經末期に謹んです、苟くも清和の臺と出で、多田の滿仲の家と嗣しより此のた、繼父清盛に隔てられ邊土遠國と住家とし、土民百姓等に伏仕せらる、然りと雖も當家の御運と開き勅宣の其一に撰れ、或時は野に伏山に伏又或時は漫々たる海上に風波の難と凌敵徒の首と切て鯨鮪の鱈に晒三年三月に責靡け大臣殿父子と生捕京鎌倉と渡、源氏會稽の羞辱と雪ぐと雖も、梶原が讒言に依て空しく莫大の勳功ともたされ親き兄弟と僅の士一人に思召のへらる、只是不運と存ず將亦前世の業因と感ずるに似たり、仰ぎ願はくば梶原

最明寺殿百人上臈

七

父子が頭と刎ね、義經に手向られば今生後生の恨みあるべからず万端筆紙に盡し難し、恐惶敬まつて白す、文治五年閏四月廿八日謹上鎌倉右大將殿義經と、讀も終らず若君涙に咽ひ給へば、同學お供の少年まで皆々袖とを濡しける、友平涙と押へ誠に義經の御遺物斗りにあらず末世の教へに成べき物其仔細といつば、頼朝程の御大將梶原が奸曲に誑めされ、實否と糾さず御舍弟と亡し給ふこと、火の中にある寶に愛て片手と焼くに異ならず、されば大將としては先よく人と知べき教へならずや、又梶原は君の寵に誇て己と忘れ、一旦の利に眼くらみ人と害すと思へ共、却つて我身と害すること、天に向つて唾き吐すと四十二章經には説れたり、扱こそ頼朝公御逝去の後、安達の景盛と頼家公へ讒言し、結城の朝光と尼將軍へ讒奏申ける程に、頼朝御存命の間こそ諸人敬まひ恐れけり、年來疎む梶原父子何に心と置べきと、和田小山畠山三浦の義村千葉之介八田小笠原藤九郎盛長以下の御家人六十六人、鶴が岡に會合し景時が罪五十餘ヶ條、連判の訴狀と認め因幡守廣元と以て頼家公へ奉つり既に誅せらる可に極つしうば、猛威と振ふ梶原が日頃の辨舌辨口も、矢筈の紋の矢も楯も大勢にたまらばこそ、星月夜の編笠や鎌倉山と夜脱にして相摸の國一の宮へはう

く逃て隠れしが、はやりにはやる我武者ども餘さじ者と在々所々、手ひどく殿しく追索され、鶴川の小鮎鷹に雉子、猫に追れしもの風あな淺間しや梶原父子、郎等下人も散々に馬に乗ても舍人なく、鞍は置ども籠は捕す都の方へと心ざし、駿河の國と驅通る代々我等が本國なり、父彌三郎夜綱一族集め小的射て勝負と樂しむ期の前、御免も乞す乗打す、友綱弓と矢探て打番ひ大音上げて、梶原殿と見懸たり歩立にて通るにも的場には故實のそふ禮義もなしに乗打は、斯云ふと宇都宮と知すになせる慮外の、よし知ば知にもせよ朋輩の情に人と人は赦しもあれ、弓矢に向つて乗打は正入幅の神罰の矢受て見よと白木の弓、大中黒の的矢衡鏑懸て引繰り、驅行く駒に拳と付け絃音高く切て放せば、誤またす後に乗たる矯子源太景季が押付と胸板へぐつと射抜て餘る矢が親平三景時が耳の根と肩先まで喉笛あけて射通され親子一所に馬上より、左手右手へ遠近の人の鬱憤世の遺恨此時にこそ晴てけれ、父友綱が其時の御恩賞の餘慶に依て、此梶原屋敷と今度某拜領し、土砂改ためいへ共那れに紅梅の早咲こそ、景時が二度のあけの籠の梅の名残とて、植置たると承はる、末の世の標しに引殘ししが、折々雨の夕暮などは梶原が一念の火、梅の梢に来るよし下女

下郎なぞが申しふらしゆへども某は遂に見ず、如何で左様の事あらんと、語り給へば人々もあつと感じてお在ます、佐野の源藤太経景次の間より罷出で、好き時分御供致し若君のお蔭に依て、御請釋承たまはり我等の仕合せ一代の徳、扱々梶原めは武士たる者の風上にも思たる者、其時節経景生れ合せ有るならば、謔言吐出す舌引ぬき綱骨引裂、踏踏つて退んずものエ、四十年運ふ生れたなめ、那の紅梅が梶原梅の何の彼奴が籠の梅、二度ののけも半分虚言輕薄らしい花の色、悪い梶原めがしやつ面踏で呉んすと、廣庭に飛で下り股立掴んで古木の梅の枝も折よ根も摧けよ、どうくどうくどうくと踏付け、拳と揚て打やうつばのはつさと折て、落花頗る狼藉たる、チ、さもそよ景時と、雑言吐て立歸れば、挨拶なくも人々は苦笑にぞ成にける、時しも牙行く時雨の雲の雪と催はず空凄まじく、山風落葉と吹立く吹上れば、紅葉天に翻翻して火烟の渦巻如くなるに、梶原が觸體虚空に閃めき舞下り舞上り、源藤太が響りに確然とこそは喰付けられ、され共人目に見えざれば、其身はさしも尙知す心も元の心ながら、氣は逆上し酩酊と酒に酔るが如くなり、斯る所に安藤左衛門光成方より急々の御注進使者と走らせ候と、大息吻て伺候する若君驚き、其使者

是々急々の注進とは何事やらんと曰へば、さん候御叔父式部の冠者時定殿、御家の重寶三隣の御旗と奪取、本國伊豆の岬へ押渡り給候、勢全く逆心の御企てと見ゆ、大殿坐禪に御籠りの内と申、延引にては御大事たるべし、屹と御征伐しるべしとの注進なりとぞ申しける、天女丸搦手と打てこは如何に、其旗といつは先祖時政に、江の島の辨財天直に與へ給つたる、三枚の隣と旗の紋と勸請し、守とも寶とも是で立たる北條家、叔父は一家と云ながら庶子へ渡さん様はなし、しや何事有ん伊豆の岬は扱置ぬ、鬼界高麗契丹國雲の果て海の果て、陸ならば駒の蹄の立限り、海ならば檣櫓の立んす所まで寶寄せく取返さで置べきもの、天女丸時宗が鎧始めの初陣に叔父の首引提すんば鎌倉へは歸るまじ、山路と廻つて人馬の足と勞らすな、由井の濱より兵船出し、只一時に揉潰せ、馬に軟置け物具せよと勇み進みし御有様實に義經の再誕と礼と打ざる計なり、梶原が死靈に侵されし源藤太進み出で、此度の先陣は此経景が給はつて眞先驅ふするにて候、仰付けられ候へところ望みけれ、若君聞も取すイヤサ先陣も後陣も此時宗が無くばこそ、先陣は某よ、いやく殿は大將軍是非先陣は経景に給はれろしと詞と返せば、いやとよ大將軍とは父最明寺殿な

らで外になし、我も汝等同然、高名は仕勝ぞよ、親にも子にも遠慮なし、急げや急げ早ければ待こと有て静なり、遅くて走る道は物憂しと名將の詠しどろしと口吟み出給へば、源藤太御袖と控へ然ば今度の御船には和蘭櫓と立申べし、ム、ウして和蘭櫓とは何ぞ、さん候馬は乗手の心に任せ引も驅るも自由なれ共、すばや引んと思ふ時船押廻すに儘ならず、不覺の負と取物に候、觸舳に櫓と立違へ脇能と入れ何方へも廻し易い様にと云せも敢ず、エ、門出悪し忌々し、一足も引じと思ふさへ引は軍の慣なり、兼て左様の逃用意、憶病神の未社殿と笑ひ給へば、同學の十四五の輩らまで手と擲いてぞ笑ひける、藤太大きに赤面し、總じて武士は進退と辨まへ命と全たふして敵と亡ぼすと以つて好き弓取りとは名付けたり、和殿の様に口廣い癖に、尾の細いと鮫鱈武者とて何の役に立たぬもの近頃笑止笑止と云へば若君腹にすね兼ね、汝ちはたつた今まで梶原と誹りながら、梶原同然の悪口我れに向つて推參千万、サア今一言云ふて見よと太刀に手と懸け給まひける、ヤア最明寺殿より外大將軍はなきものぞ、御身も我れも同然鮫鱈とも河豚魚とも云ふて見せんと罵しり合ふ、サ、鮫鱈武者の切つ先受けて見よと援き放なし給まへば、土肥佐々木なんぞ

云ふ一騎當千の嫡子ども、一度に太刀とほらりと抜真中に追取込め、我討捕んとひしめく所と友平絶つて、ア、く勿体なし、大事の前の御譴み最明寺殿思召も穩便ならずと、御佩刀納させ、罷立て經景鎮まり候へ少人達と、館に御供有ければ、光成の使者經景が小腕取て引出す、逆櫓の遺恨留まつて今魂ひに入代り、身は空船の梶原が心と成るこそ淺猿しと寶治二年十一月癸亥の玉霞、雪の下の廣小路一ばいに降る黒羽織、奴が髭に垂氷ゐて奥齒にのじる唐芥子、赤熊の馬標御馬北風に嘶るせ、討て出たる大名こそ最明寺殿の御舎弟式部の冠者時定公と勢ひ猛なる供先と、いうつらしき頬冠り若黨二三輩引具し、押割て通らんとす徒士の者供引捕へ、コリヤ盲人め冠者殿と見知りぬると、頬冠ひつたければ佐野の源藤太經景なり、馬上より聲と懸けヤア經景の時定直に尋ぬべし、つゝとは是へと呼付踏たと睨で、御分は身代不相應に唇々敷く忍ぶ体は不審し、兄最明寺坐禪に籠りお在る内は此冠者が執權なるに供先割るは緩急者申し分に依て飽と過怠に吩咐んと、返答悪くば鎧の端にて蹴殺し退んず面色なり、經景土に跪跪さ御答至極仕まつる、聊の慮外に候はず、直に注進申上る儀候ゆる、人目と忍び右の仕合せ眞平御免蒙るべし、叔御注進の趣きは先某

が兄佐野の兵衛政経、先年人知れず鬪討に討れ其子源左衛門経世は、阿房拂に仰付けられ
 兄政経が遺跡佐野の庄此経景に給はつて、奉公の忠と勵候、然に紅が谷経世が屋敷某望み
 せ共、御用の場所として吝惜あり、此度故もなき者にさへ、彌が上に屋敷地と給はり、多
 年懇望の我等には代地の御沙汰にも及ばず、経世が屋敷と若君のお花畑に成り拙者は鼻と
 わく斗り、國と保つ者は一步の地も功ある武士に與へ弓馬の用に立てこそ、何ぞや若君の
 未だ乳呑ふ飯喰ふと、義經の再誕とはとのひの僧正に誰りされ鎌倉の御家督として大分の
 地と花畑に費やし、若しもの時に草木の花が給一本の役には立たず、當家に於いて天下の
 執權には、誰あらふ冠者公と諸人舉つて申す所、殿の嗣せ給はんに誰がぐつとも申すべき
 、左ればこそ天女丸、殿とけふたく思はれ、最明寺殿坐禪の内に責亡ぼさん催はしにて、
 則ち物讀の師匠宇都宮友平、安藤左衛門光成以下と語らひ合戦の用意事急に候、旁々御油
 断あるべからずと真のい様にぞ説しける、冠者は彼に物が付て云するとは夢にも知らず、
 馬より飛で下り、チ、く神妙の注進大慶く、脇のらさへ齒痒きに我れに油断あるもの
 ろ、振らぬ隠搦と見せ申さんと首に懸たる錦の袋と取出し、是ぞ辨財天先祖に授給はりし

三ッ鱗の家の旗先此主に成らば北條家の大将なり、御分は急ぎ此旗と伊豆の御崎へ守奉
 まつり、宇賀の社に込置き漆の船場に關と据ゆ、渡海の船と留ひべし追付け後より加番と
 して、佐々木の十藏廣綱と遣はさん、我鎌倉と持堅め安藤宇都宮に閉門せさせ、天女丸と
 押籠置ん兄貴の坊主が咎めなば、靜謐の世と騒する謀犯人と訴たふべし我願ひ叶ひなば屋
 敷などは軽いこと、一ヶ國は極つて其外に兼國望次第、辨財天も照覽あれ虚言なしとぞ語
 りける、經景思ふ圖に讒言し是殿とともものこに其兄貴の坊様ぐるめにして遣ふとは思さ
 れぬ、ヤレ夫と高ふは云ぬこと心に計り持て居よ、向後御邊は一方の大将と頼むらば、
 威勢と付る褒美として一家となつて北條の家の定紋譲るぞと懸と付たる鱗形、北條殿や庖
 丁殿お懸らん末こそ危うけれ、去程に式部の冠者時定は天女丸時宗と無体に押へ、謀犯人
 と説し松が岡の彌勒堂に取て押籠め重代の赤旗と伊豆の御崎に懸置き、山手には二重三重
 の柵とより、海手に數箇所の物見番、龍神崎の船場には佐野の源藤太經景佐々木の十藏廣
 綱役所と構へ、干潟遠く逆茂木引き渡海の船さへ停止あれば、漁村の賤も鮓釣り鯛釣り兼
 ねて網の手と、他に海松と擔さする蟹もさう手と打休み、波の遊魚も飛ぶ鳥も通ふ方なき

要害なり、折しも夜更け波静らに番所の篝火しめり行ば、天女丸は漸に圍みと免われ忍び
 出で、宇都宮たゞ一人語りひ湊に紛れ付き給ひサア時分は好きぞ友平、兩番所も鎮まつて
 海上は引潮なり、命限りに渡り越し向ふへさへ着たらば、番の奴輩切敷し旗と奪ひ返すべ
 し、よし仕損じて死する共取返さずは生甲斐なし、死るに極めていざ来いと、飛入らんと
 し給ふと宇都宮抱き止め如何に引沙なればとて思召ても御覽せよ、三里に餘りし海の面、
 歩渡りの人間業に叶ふべき様候はず、潮に溺れし御死骸と雜人原に引索され、耻辱と云ひ
 譏者不利潤付くといひ、旁々鹿忽の御振舞御思案のいる所と、制すれば齒嚙となし、エ、
 口惜し是式の事と治兼ね、父最明寺殿へ言上し坐禪の妨げ御大願と破らんは、後代までの
 誹りの種親に離れし我ならば冥土へ間に遣るゝのと嘲けりは歴然たり、エ、翼もがな歸も
 がなと平砂に兩足踏込んで拳と握りはらゝくと無念涙のせきあへず、友まをばせる小夜千
 鳥驚く方の人足や、年の頃は十八九初夜の月さへはや西東、さまよふ振にて人よとちら
 りと見付足早に逃んとす、宇都宮走り寄りむすと捕へ、こりや女め必定此番所へ呼れし傾城
 じやな、我々此許に有罪と番の者に知る振と見ぬた、是ら直に汝が宿へ歸ればよし、

番所へなど入ならば海へ切てつゝはめん、サア如何じやと威しける、ア、つがもない何の
 其様妾等である、此浦のうづさの艇、此頃御法度殿しう若和布一本海松一株採る事ならぬ
 ば、朝夕の迷惑さ夜は番衆の隙間もとそつと見に来たばつゝり、はんに男に手と探れた一
 期の始にあた惘然な、跡がひりくひりくする、那の若衆様やんはりと締直して貰ひ度
 と浦の蟹さへ當代は只は通さぬ慣しなり、友平是は屈竟彼奴と嫌して海の淺瀬と問と思
 ひマ、免せく知らなんだ、汝に問たい事がある返禮には錢やらふ隙は取まい、サアあの
 濱へ一寸来いと手と探れば、エ、錢取て濱へ行やうな者じや御座んせんとしてひんとする、
 若君見兼て是々蟹人、我々は念願あつて向ふの御崎へ忍ぶ者、此本望達すれば蟹のうづさ
 も漁船も前の通に自由なり、此灘と越様あらば何卒指南は成まい、別ある事よと曰まへ
 ば推量やしたりけん、何が扱心尋といひ世上の爲包まん様はなけれども、昔より此入海歩
 渡は沙汰にも聞ず去ながら、如何なる千尋の大海にも、汝頭沙別上り沙落沙、片刃諸沙女
 夫潮投潮脇潮なんぞ、潮合ひと見てうづさの蟹の龍宮城へも入なれば、叶はぬ事共申
 難われく月影の二に割て一筋に尾花の塵く如くなる波の別れの末こそは蟹の通ひの沙路

なれと、指差してぞ教へける、若君も友平も今は案内御坐んなれと裾の、けてさんぶくと入給ふ、嗚々假令沙路覺ゆても蟹ならぬ身の危険のこと、怪我遊ばすな先へとといへ共耳に聞入す、三反計りは足も立つ、次第く波は高し底深し、流石の友平力なく、先々後へと御手と探り元の磯邊に打上りお腰の物に水入ぬる、やれ先お足と拭ふて進せて呉れ、頼むくと捲り手に袴と絞る計りなり、それく人の云こと聞分なふ情の強はいお身の損、若衆様のお足拭ふにも手拭はなし私か、鹽焼衣お慮外と上がい下がい疎くさにして、足の甲のら足首まで、くく五のなお肌やな、此許はお膝此許は太股内股の、此もよなら私や小町お前は四位の少將で車の榻にと抱付く、若君飛び退き慮外者めと、柄に手と懸給ひしと友平しばしと止め參らせ、是女那方は鎌倉殿の若君、今度の騒隠れなければ知つらん、汝が力に海と越え御旗と奪ひ參らせなば、財寶の願ひは云に及ず、假令一夜のお情でも相逢有じとやさるゝ、蟹婿げに打笑て、さこそは見付參らせたり誠に腹さ蟹の子のお情とは懼りあり、鱗形の御紋付のお肌着一重下されば世の思出に肌に着け、千里萬里の荒海なり共波と潜り水と分るも蟹の業、奪返して奉つらんとやせば若君宇都宮、それ

易いこと是なり共と表紋の唐絹に唐綴したる柳裏ひらりと脱でたびければ蟹は蟹さ打のづき岩先に駈上り、自らは小袋坂金龍水の池の邊に年經て住ものなるが、江の嶋の叔母君より給はつたるはだの産着と悪人に奪れ、五体の力盡はてして今北條家の生鱗九萬九千の飾と成つて、神變神通自在と得せつなが間に彼旗と奪ひ取て參らせんと、逆巻波に飛入て分行く潮八重百重百の細める面貌に尾は二十尋の金の鱗月に映じて游行く、辨財天の春風の旗と守の神体と思ひ白波走りしは帆懸し船の如くなり、波の音に目と覺し番所騒げば悪のりなんと、友平若君身と潜め磯山蔭に忍ばるゝ、源藤太經景木戸と開せつと出で、風もなさに波の音千鳥鷗の亂るは、天女丸が方より水練の忍びと入たるに疑がひなし、すはく沖に物こそ見ゆれ仙術魔法の者なり共、我馬上に及ばんやと元來武勇第一の梶原が精靈入交たる其驗、弓箭の本意此時と願て物具堅めける、此許に佐々木廣綱は相番ながら若君に兼て心と寄し故聞ぬ顔にて控へしが、經景が打立よし共に防ぐ風情にて、しやつ坊げんと馬よろひ華麗にこそ出立たれ、經景其夜の装束は無垢禰地の直垂白金の摺付小札、白糸にて菱綴したる斑威の鎧と若、くるぼろの矢の廿四差たる籠のさかひ、本重藤の弓持

つて、雨夜と云し錆月毛の聞ゆる名馬に乗たりけり、佐々木が立物具は紅の裾襪に所々四ツ目結ひすつたる直垂卯の花と黄に返して、袖印付けたる鎧筋さうふに塗りのく矢、吹寄藤の弓持て、長月といふ黒栗毛の馬にぞ乗たりける、二人互に劣じと引懸引懸打たりしが、経景は佐々木に一反計り進んで海へざつとぞ打入たり、廣綱先と越れじと聲と掛て経景殿、冬海は潮早し腹帯が延て見えそふぞ、深處になつて鞍のやさん締給はぬると呼ばれば、経景もとや思ひけん手綱と鞍のものがみに捨て、左右の鎧と踏すのし弓紐と脚へ腹帯と解て引しめくしむる間に廣綱すつと乗抜て、佐々木が家のこつはふ御免われと云儘に、ざんふと打入半町ばり先に進んで游がせける、ぬつたい佐々木殿高名せふとて不覺ばし、給ふな、此頃變のつづきも絶ぬ海松が茂つて見ぬ候、馬の足纏はせて黙ちあらん笑止さよ、心得られよと誂れば、チ、親にて候高綱が、傳へし習ひあんなると、太刀と抜て水底と切拂ひくざんづにぞうと乗下り、手綱繰上げ聲と懸け馬に力と添へたりけり、冬も中旬の浦吹く風磯打波と巻上て氷やそらく掻き、天も凍て散散り雲の足さへ早潮に底の岩角塊々として海上道に蹴々たり、是は一騎當千の高綱が嬌々なり、彼は文武二

336877

道の武者権原が魂魄なり、何れに勝負あらばこそ廣綱進めば経景續き、経景進めば廣綱續き響みと引揃へ、押並て渡すとすれば切付太腹ぞうくく、波較壺に打越てのためがたに突流され、半月に乗る所もあり、馬の草分けひながひづくし、さらくくくくさつと乗分け乗割て、一文字に行く所もあり、高き波には一鞭呉れて、ゑいゝ聲に躍越ぬ低き波にはしつとゝあて、手綱と繰て乗下し渦巻波の右どもゑ、左どもゑにくるくくくくるりくの輪乗に潮と巻はくし、巻戻巻くづし蹄に蹴立る潮烟り、隔の霧と立塞つて山さへ見ぬ海の内、星と目當の諸鎧息もつがせず踏もためず、負じ劣らじ我先にと喚叫けんで渡したり、経景馬や劣けん馬上にや疎のりけん、三反計り乗後れ淺處に駒と懸寄て、漂流ふ浮木に手と懸て一息ホット吻たれば、佐々木は沖の流洲に駒と控へてくらゐに突立上り、悪う候経景殿伯父盛綱が藤戸の一流、海とば斯ぞ渡すものか先へ參る御免われと、手綱のいくり乗出す、陸には兩家の郎等組子、波打際にかりひたり、片唾と呑で控へしは前代未聞と云つべし、斯る處に式部の冠者時定、百騎ばり引卒し喚て來たり、ヤアく兩人天女丸こそ宇都宮と語ひ何處共なく落失たり、方々が勢ひは如何なるもさぞと呼はつ

たり、經景馬上ながら、扱は只今此海と遊越すもの候故、兩人の如く追懸候、疑ひもなく天女丸ぼつめ引提參らんと、駒の頭と立直せばやれまてく年にも足ぬ小丁稚、彼奴等が分にて遊越こと思ひも寄す、夫は必定水練と入て、其身は此磯山に隠れ居るに極つたり、我々山と狩出し濱端へ追出さん、兩人海に下立て射取や射取れと下知すれば、承まはると經景弓と矢探て打番ふ、佐々木もアツと答へながら誤まつ振にて冠者めが、たゞ中の一筋と思ひ込でぞ控へける、時と移すな狩出せと、打物扱連松明振り谷よ空よと狩立つる、友平今は是までなり濱の手へ落給へと、暫時支ゆる其隙に若君磯邊に走り着き、後と見れば時定られた手矢はげて追驅る、今は詮方あら磯に沈まば沈めとさんふと入り、渡るともなく行ともなく陸地に立る如くにて、四五寸沖に浮み出で足下と見れば不思議やな、蟹に與へし上の衣波の上に漂濺して、若君と救ひ立てたるは宛然彼の如くなり、沖には經景矢尻と磨き寄ば射留ん其勢ひ、陸には人衆切先揃へ返さば討んと此きは、火境に落し罪人の取付く難と黒白の鼠さしつて悪龍舌と振るといふ、苦界の譬に異らず遁れつべうはなりのけり、しつし所に二階堂入道旅裝束にて息とばのりに馴付け、暫時くく事の仔細は存せぬ共、是は大事の御使私しの儀に有す干戈と止め聞給へ、今度某大殿の仰と蒙り、奥州高館に下り判官殿の御墓と祭り淨め、同く頼朝より御勘當の御教書と取歸り仰に任せ只今燒捨申るらは御勘當の罪消て義經の靈魂安執はれ、若君の御身の上武運の御祈禱たるべしと、御教書の封と切下人に持せし正火と探て、打掛れば炎焰々と、天に通じて名將の順逸精智悦び給ふ其驗、白金の翼ある白鳩虚空に舞下り、天女丸の懐に納り入ぞ不思議なる、判官の虚名晴ければ讀者の勢ひ力も弱り、梶原が亡魂冥々として失てげり、經景心茫然と夢の現つる空蟬のものけの聲の如くにて手綱とる手も覺えなく、平首に抱き付く馬も足と立らねて、波に漂よひ浮ぬ沈みぬ、泡沫の安房の浦路に流れ行く、冠者苛つてやア物々し、假令生れぬ前生は判官にもせよ辨慶にもせよ、現在にては我明なり叔父に向つて逆心のまへ、國と毀ひ家と破る惡黨征罰何の憚りあらん、船と浮べ熊手にのけ、擲捕れと願廻り、どつと蘆邊に下ひたる、兵衛無雙の義經の靈氣と感せし天女丸忽然自然の妙と得て、波も潮も事とせず、巖の險阻にひらりと飛び、磯の松が枝躍越へ大勢に向ひ、天狗に授かる飛行の術鬼一が傳へし一卷の、太刀風さばく虎の卷獅子奮進虎亂入前と拂へば後

に在り地と擲れば霞に入り、のけるふ稻妻水の月宛然飛鳥の如くなり、差もの大勢一人に切立られ冠者も數ヶ所の痛手と負ひ、命斗りと免れんと水練は心得たり海へとうと飛入て伊豆の御崎と心差し扱手と切て遊ぎける、沖の浮州に扣へたる佐々木の廣網向ふ様に馳乗入れ、天道と守る廣網は天女丸の味方ぞや、尋常に腹と切り給へ左無くば佐々木が矢先に悪て後世吊はんと云ひければ、冠者大聲上げて泣出し夫は餘り酷い仕様、如何に水と得たればとて三里五里は游がれず、今の間に餌の餌食と成る我身、些少の命と助てたも、佐々木殿廣網殿と立遊して拜けり、佐々木返答にも及ばず中差探つてのらりと番ひ兵を切て放つ矢に、膽のたばねと射通されまつのい様は刎返し底の水屑と沈むと見て、殘る軍兵うら崩れして皆散々に逃散ける、時に海上漣波立て月清々たる波間より紫金色の耳ある蛇潮と卷來る其音は和琴の調の如くにて、磯邊の松に攀登りく梢と脚へ尾と垂て鱗の衣とばらはらく拂ひのこすや三枚は家の紋付く旗の手の融々と懸らせ給ひけり、若君三拜恭敬して戴き納め歸るさの道の用心、佐々木は馬上に先と打てば、後と押さへて宇都宮君判官の再觀なれば二階堂は辨慶と敵の拾たる鎗長刀突棒刺又熊手おつとり打擲げ、夜は白々と

逸話

石島御

七ツ道具のけ六ツ、五ツ五代の北條家四ツ世の中三ツ鱗尾鱈と付けてを語りける

最明寺殿道行

行衛定めぬ道なればく、越方も何處ならざし是は一所不住の沙門にて候、我此程は信濃の國に候ひしが餘に雪深く成り候程に、先此度は鎌倉に上り坐禪に籠り春になり修行に出ばやと思ひ候、蝶の翼の白粉と草にこぼして梢には鶴の霜毛と脱ぎ懸る、雪は花より花多きを翻譯してさ木曾の三坂の谷風は吹けども袖に寒からで、名も妬まじき風越の峯の吹雪を身には染む下つ知をいへり、身は墨染の墨衣さるがら雪の一筆鳥尾羽打られし修行の旅、佛恩報謝の爲にもあらず自當時面並元上生菩提の道にもあらず、浮世の民に覆ふかな覆へど洩る竹の笠似合ぬ身にも引締て、しや自王と三讃美を以て祈るや智んと召たる御有様ありがたし共頼み有り、幾重越しても信濃路は未だ谷峯の大井山人里遠を以て和歌を詠しよと、輕井澤見上れば朝ぼらけ淺間の嶽に立烟その一筋と種々に霞に詠じ雲に見て歌人は思と述考逸定めぬ夕かきと、我は烟の立居にも民の籠の賑ひと天に祈の千早振る雪と袂に幣帛とれば雪は五のたまふなり、穀の精たりと、唐土人も豊年と祝ふしるしのあれくく、地百も在所も賑々福々福島の

殿の妹脊の妹は初摺る脊兄は米搗く麥搗く餅搗く〜望月の里をよむ迄であるといとん〜サ
 アとん〜サアとん〜と杵の音確氷峠に差懸り、上れば下る谷川の凍ぬ程は聲立て春も
 近しと岩間水木々の木葉と吹溜て、けふ山姫の衣配り物裁よしと色々の錦裁なる板鼻の宿
 と麓の坂本や諏訪の湖水猶呀て鴨や鷗や鶯の番も雁金も下り居る程は押なべて、皆な白
 鷺と深山下風がざら〜〜颯と吹てはばつと群立ち拂ふ翼に、自がとり〜色品と別て見
 せたる雪の空残の月は浮のめども兎はなつむ厚氷驛路の馬ぞなみ走る、走る馬にも鞍鎧武
 藏も近き秩父山、八王子山の山腹も外山の瓜木樵蕨し、雪とくゆらす炭竈や深谷の宿の深
 々と冬籠せし一枝も、春待顔に初花の咲のけんとや一二のうけ熊谷村にさうづきの佐野の
 他個達着にて強止めんと詠置し古歌と吟て凌共雪の塞のさのみやは佐野の渡に着給ふ宿も
 がなと夕顔の夫には有ぬ小家の軒椽疎に傾さし雪折竹の上簷戸や、主人は貧女と思しさが
 年も三五の玉箒ひさしの雪と掃落し落せば襟に袖口に首筋元にひやく〜、ア、冷たや
 と手と拭くも下履近うして尙優し最明寺殿離に坊立み、ヤ々お女郎越後より下總の檀林へ
 通る所化の僧今日の大雪先へも後へも参り難し貧子の端に只一夜願ますると有ければ、ハ

アお易い事乍ら主人の留守に私 が泊まするも如何なり他方と頼なされませかいとし様
 やと愛嬌ある、ム、ッ主人のお留守とは扱は貴嬢は御内衆の、イエ〜主人は私が姉御此
 頃他國致されて主人と云は姉様、チ、然ば貴嬢も主人同前江口の君が假の宿に心止なとヤ
 たは、夫は色ある優法師炭の折る木の端のと云様な此坊主、色事の用心ならば氣遣ひある
 なと曰へば娘も莞爾と打笑ひ、尤も色と云物は容貌とは云ひながら如何やら時の機會では
 別げでも兎口でも油断がならぬと走り込む、天下と裁判く御身にも此返答は行幕て坊立み
 給ふぞ殊勝なる、世の中は何の経世が留守住居妻は手足も土大根蕪るぐなも摘持て歸る山
 路の白妙に、ア降たる雪のな如何に世に在る人の嘸面白ふ見給ふらん、夫雪は鷺毛に似て
 飛で散亂し人は鷺毛と着て立て徘徊すと云り、然ば今降る雪も元見し雪に變らねども、
 我は鷺毛と着て立て徘徊すべき袂も朽て袖狭き細布衣、陸奥の今日の寒さと如何にせん
 あら面白からずの雪の日やな、最明寺殿是こそは以前の女が姉ならめと、嗚々主人の御方
 に候の御覽の如く旅僧の身ね宿の御無心申せしを主人のお留守とありしゆる、待設けた
 る御歸り前後と忘する大雪今宵ばりのの御惠顧み入るとぞ仰せける、實に〜易き御事な

が見苦き賤が伏家何とてお宿と申べき、イヤ〜旅と云三界の家と出たる世捨人草の蓆も我爲の玉の窓と難有し是非に一夜と曰へども、那れ御覽せ我々夫婦兄弟さへ住居兼たる休なれば泊め申さん様もなし、是より十八町彼方に山本の里とすて好き宿驛の候へば暮ぬ間に一足も急がせ給へと云捨て庵の内へぞ入にける、わらさよくもなや由なき人と待つるよ浮世の人の情なきも我過まりと願みて、歩み勞るばかりなり妹の玉草涙ぐみ、いたはしや御出家様最前お宿と有しのおとも姉様の心如何と存じ外に立せ置ませし、斯く零落しも前世の因果切て出家に値遇せば經世様の武運も開け後世の爲にも悪い事なされた様にはよも有まじ、泊てさへ進ませば別に馳走は入まいと私や思ひますと云ひければ、ヲ、優しや能ど氣が付た是程の大雪に遠くはよもやと表に出で、喃々旅人お宿參らせふなふ餘りの大雪に申事も聞ぬぬよの、悼しの有様やな元降る雪に道と忘れ今降雪に行方と失ひ、一ツ所に佇立みて袖なる雪と打拂ひくし給ふ氣色古歌の心に似るぞや、駒止て袖打拂ふ蔭もなし狭野の渡の雪の夕暮斯様に詠しは大和路や三輪の先なる狭野の渡、是は吾妻路の佐野の渡の雪の暮に迷ひ勞れ給はんより、見苦く候へど一夜は泊り給へやなふ旅の僧旅のお僧

と招かれて、夫は嬉しき志ざし假の愛世に假の宿荷且ながら値遇の縁、一樹の蔭の宿も此世ならぬ契りなり夫と雨の木蔭は雪の軒ふりて浮寝ながらの草枕是へところは請じけれ、イヤ是玉章折角お宿申ても供養致さん物もなしお淋しうらふが如何せふぞ、妹様幸ひ粟の飯さもしけれどもお慰みと櫃取出せば、ア、其様な物何のいの折節九獻もなしお菓子は無いのと夕霜の置ぬ棚とや捜すらん、是御兩人旅にしあれば椎の葉に盛とるや粟の飯とは日本一の醍醐味御馳走に預りたしと曰へば、ヤレ〜夫はお嬉しや切ては何も奇題にと裁の折箸土器も由緒あり氣なる響應なり、耻しやお僧様此粟と申物往古我夫世に在し時は歌に詠み時に作りたるよこそ承まはれ、今は此粟と以て命と繼ぎ候ぞや、實あや蘆生が見し榮華の夢は五十年、其邯鄲の假枕一睡の夢の覺しも粟飯炊ぐ程ぞのし、あはれや實に我々も打も寐て夢にも昔と見るならば慰む事もあるべきに、喃御覽候へ住うられたる古里の松風寒さ夜もすがら寝られねば夢も見ず、何思ひ出の有るべきと坐に涙と浮べける、旅僧も惘然催され墨の袂と絞る、更行くまゝに夜寒さ増り冷渡る何とら焚火に焚てあて參らせんや、思ひ付たり我良人世に在し時鉢の木と好き數多の木と集め持れ候ひしと、斯様の体裁

に衰へ云れぬ貧の花ずきと皆人々に参らせて、今はやうく三本残つて那の雪と持たる梅
 櫻松別て良人の秘藏なれども、今宵の響應に是と焚火と立んとすれば、暫時く是は思ひも
 寄ぬと御心志しは有難けれども、重ねて世に出給ひての御慰み無用になして給はれとよ、
 イヤ逆も此身は埋木の何時の盛に何時の花何時の時節と待たさざ、只徒らなる鉢の木と
 御身の爲に焚ならは是ぞ探葉汲水の法の薪木と覺しめせ、しるも誠に雪降て仙人に仕し雪
 山の薪木斯こそ有らめ、我も身と捨て人の爲の鉢の木切るとも、よしや惜ららじと雪打拂
 ひて見れば面白や如何にせん、先冬木より咲初る窓の梅の北面は雪封じて寒さにも異木よ
 り先立てば梅と切やそむべき見しと云ふ人こそ愛けれ山里の折るけ垣の梅とだに情なしと
 惜みしに、今更たさ々に爲べしと兼て思ひさや、櫻と見れば春ごとに花少し遅ければ此木
 やわぶると心と盡し培養しに、今は我のみ説て住む家櫻さうくべて火櫓になすぞ悲しき、
 扱松はさしもげに枝とため葉とすのしてあり、あれと植置し其甲斐今嵐吹く、松は元よ
 り煙にて薪木と成り理りや、切くべて今ぞみるさ守衛士の焚火はか爲なり能く寄て煖り給
 へや、等閑ならぬ御深切家と忘れ肌は彌生如月の暖氣にあたる梅櫻花みる心地候ぞや、

扱しも如何なる人の御行末男あるとの家名字は何と申候ぞ、自然の時のお爲にも何の苦う
 候べき聞まはしと仰せける、ア、人がまじや無い往昔と名乗も流石面ふせ去ながら此上は
 何とのさのみ包むべき、是こそ佐野の源左衛門經世が成る果て哀と御覽候へや、扱も過に
 し仁治二年鎌倉は常最明寺殿の御兄君經時公の御さばき、夫の經世は將軍の御供して在京
 の其跡の事、經世が父我爲には舅佐野の兵衛政經故も無く人知す暗討に討れ給ひしと、聞
 と等しく我夫は取て返し下向の時一族の讒に依て鎌倉へも入られず、道より直に御勘氣と
 て所領莊園召上られ經世親子が累代の知行一所も残らず、叔父源藤太經景に押領せられ生
 甲斐もなき此有様、親の敵も大方は推量に紛ひなけれども實否と糺し討ん爲、折々他國に
 身と姿し跡より隠す雪の庵雪は春にも消殘る、夕も知ぬ武夫の身の上憐れみ給へやと、滑
 然とこそ泣居たる、實にく夫は聞及びたる物語何とて鎌倉に上り其御沙汰は候はぬぞ然
 ばとよ、夫婦も左は存すれ共運の盡として最明寺殿法華堂の坐禪に籠せ給ひ、萬機といろは
 せ給はねば天照神の岩戸に籠り月日の光隠れし如く理非の分れん様も無、去ながら斯零落
 ては候へ共取傳へたる梓弓、矢竹心は張詰てあれ御覽候へ是に武具一領長刀一枝、又あれ

に馬とも一疋繫て持て候、經世常々申せしは只今にてもあれ鎌倉に御大事ありと聞ば、此具足取て投懸け錆たりとも長刃掻込み、瘦たりともあの馬に掛鞍置てふはと乗り女房に口探らせ、一番に走參じ御着到に連なつて、扱合戦ばし始まらば縁何万騎ありとも一番に割て入り、手に立つ軍兵より合打合ひ分取高名譽れと願し、一方と責破り君の御馬の眞先驅け思ふ敵の大將とむんずと組で差違へ死なんす身の、エ、口惜や此儘ならば徒らに飢寒に迫り死なん命なんばふ無念の事さふぞと姉妹のつばと伏沈み泣き口説こそ道理なれ旅僧も至極の理りに衣の袖とぞ絞らるゝ、よしや浮世の浮き沈み斯ては果てし只頼め、我世の中に有ん限はの誓ひと願ひ給へやと詞と殘し殘る夜も明方近く際白く雪も小歌ば然ばとて暇中と出給ふ、姉妹假の宿ながら是も御縁と覺し召し春お下りの折柄は立寄り夫にも逢ひ給へ命の有ば我々もと、然ば然ばの御名殘自然鎌倉にお上りあらばお尋ねあれ甲斐なく敷はなければも公方の縁になりやさん、御沙汰拾させ給ふなと云ひ捨て出舟のともにも名殘や惜むらん、已に今年も臘月下旬最明寺殿の御臺所松下御寮の仰せとして俄然希有の御布令あり、晝夜の早打ひまもなく近國殘らず觸にけり、喃急がしや〜只今我等當國へ下る事

餘の儀にあらす、扱も最明寺殿天下の政道と考へなされん爲め、坐禪觀法の方丈に閉籠り近習外様の侍士はやに及ばず、御臺若君へも御對面なく禁足なされ御座候、此隙間と僥倖とや思はれけん御舍弟式部の冠者殿佐野の源藤太と語り、謀犯と起し遂に其身も亡び源藤太は落失せ漸く事治まつて候、斯様の騒動の出來するも最明寺殿館に御座なき故、國に執權なさは人に魂魄なく家に柱なく温飽に汁なく繪に酢のなきが如しとあつて、辱けなくも御臺所坐禪と御出なさるゝ迄は最明寺殿御名代との御事にて、女中の御身に執權職の装束と召れ御側には諸大名の與方、何れも男の出立にて非番當番ひまもなく、政道執行なひ給ふこと往昔の尼將軍に相も變らず候、左はすながら人の口には戸が立られず、雌雞が時とつくるの鎌倉殿はとゝの、じやなと、嘲けつて、すは大事と云時に勢が付る付ぬる物は試しに集て見よと、阪東八ヶ國の諸侍士悉皆く物の具して急ぎ鎌倉へ御參あれ、仰付けらるゝこと有りと觸させられて候が、餘りに諸軍勢とそく候程に何とて遅なはるぞ催促致せとの御使と承まはつて候程に急がばやと存じ候、ヤア〜何とやぞ夫へ御參りあるは武藏相摸の御人衆とやの、先は早とこと急いで御參り候へ、あれへ見わたるは上總下總の御人

衆じやヤレ〜奇麗美やのなる出立のな薄いと御事御急ぎ候へ、イヤ是へ見ぬたるが常陸の國の御人衆の、道理で眞先な武者が横楊の棒と引提げたは常陸坊と云意の、一段と華美な出立のつれと何れとヤされぬ、此國々へは最早参るに及ばぬ足と助つた、ヤア未だ上野下野の御人衆がお見ぬない、先上野へ参らふ何と云ふ是へ出あるが上野の御人衆じや、ヤレ〜嬉しや参るに及ばぬ今までの出立に劣らぬ夥多しことのみ一刻も急ぎ候へ最早悉皆く御参り候、我等は先へ罷歸り各々鎌倉へ御着あるよし申上ふと存する、皆々聞れ候へ關東八州の諸軍勢是まで御着候を其分心得候へ〜と觸て通りし勢ひは勇々しくも亦華々し

女勢揃へ

往昔晋の朱序が母千余人の女武者と領じて襄陽に城と築き賊敵と防ぎ夫人城と名付しは、上代異朝の寶婦をのし鎌倉の御臺所せんひ松下禪尼の風と慕ひ、自身執權のよたつごと、烏帽子ぎは氣高く水干の衣紋掻き、美精好の長絹黄金造りの御佩刃式目所の上段に悠々と坐し給へば、左右は白齒のお腰元島田解いて若衆番廊下傳ひの長袴はなと並べし如くに

て御太刀の役調度掛け作法正しき廣廂諸大名の御前方何れも男の出立にて、面々殿御の役々の座並亂さず伺候ある、第一の座上には都六原陸奥守重時の北の方おれんの前、連理の若松若竹に比翼の鳳凰の草の総物したる薄直垂面黃裙襪の袴とし横幅廣く結ばれしは、此月帯の御祝儀と言葉もぐさつゝまじさ袖掻合せ着坐ある、次は秋田の城之介義景の御簾中おりう御前はせい人の子の親なれど何某の中將殿の乙娘烏帽子なれたる態に戀と染込ひ狩衣のつも長々と結び下げ裏紫の藤袴男染たる摺足も瓜先そつてを見ぬにける、是も同風折に薛繪の飾太刀佩たるは、足利左馬頭の御内室お吉の君、此春嫁つて人中と忍ぶ文字摺忍ぶ布折目正く着こなせし、素袍袴のりだちもやは〜とせし挨拶の何れも是はお早ふと物靜にぞ伺候ある、次は佐々木隠岐の入道の息女お百の姫、目結の直垂五色の糸にて菊綴し嫁入盛りの花盡し、袖の重ねに匂はせて大人くろしき懸烏帽子行儀正しき割膝に袴の裾の高ければ嘸紅かの下紐の裾や分れん心懸さよ、同じく續て四條藏人の奥左近のお方、金紋紗の狩衣薄色の指貫白銀作りの太刀横たへ、寺社奉行の座にぞ着れける大目付は宿谷の左衛門が女房おつげの前、是も二人の子持筋に纏纏染たる素袍袴うち刀さしはらし、四

邊近所と見廻して、目と働のす顔色に役は嘘と知れける、是は名越金吾の後家熊千代が母おさいと云は、年ばいも磯邊の善知安方の子と後見て身と捨す、髪は切ても何の其我子の末も君が代も万藏鳥帽子引こふで、御披露所に着座ある貌もつやくはやくと老て二度若後家や、昔の蝶の吸残す花の露浮く斗りなり、次は山名の物領娘おらくは今年十八歳土岐の二郎が妹おふりと云も脇詰の、年はいおねと格好の太夫のお内儀おさち御前、思ひくの太刀狩衣大納戸小納戸進物所御膳番役所くに着座ある扱其外お臺所の彌惣が女房、圍爐裡の間の加藤が女房おはいおこん、料理人の三太が女房お鍋の前油奉行燧燭奉行酒奉行の彌吉兵衛が女房お樽の前お燭の前、茶道坊主の珍齋が妻お茶々の前に至たる迄、其品々の男出立直垂狩表布衣素袍長袴切袴へいれい白張たいらうちやら、袖と連ねし粧ひは女護の島とも云つべし、賑はしとも愚なり、中にも佐々木入道が息女今日の若到承たまはり、中門の扉押開けば東八ヶ國の諸軍勢召に随ひ登上ある、當國には伊藤の一族長野清原曾我山越河津大場竹の下櫻井岩永土肥岡崎三浦佐原田原小笠原小山平山宇都宮手勢くと引卒し、旗印馬印兜の星と輝のし中門の廣庭より大名小路の極樂橋鎌と

立べき臺地もなく、人馬充滿なみ居たり晴がましくぞ見ゆにける、佐野の源左衛門経世は今度の出陣望む所の本望と、ちぎれ具足に鍔刀やせ馬に繩手綱女房は長刀うたげ馬の口に引添て、物其數にあらざる氣色さぞ笑ふらん笑はわらへ所存は誰にの劣るべきと、心ばありは急げども弱さに弱き柳の糸の、よれによれたる瘦馬なれば打てどもあつれども、先へは進まぬ足弱車の御所の此方に駒と控へて見渡せば、東八ヶ國より集つたる數萬の軍兵是と見て如何なる者ぞ見苦しや、あのさまで此中へ出づらは何事と一度にどつと笑ふ聲観歌と作るが如くなり、此音奥に聞ゆしやは、御臺所御悦喜あり、自身女の身にて此度の勢揃へ斯様に随ひ集まること、是皆殿の御威光目出度も若も重ねて如何なる大事あるとてもまづ此如く走來らば即時に敵と追散し、鎌倉は千代萬代心安や目出たやないで軍兵に一禮して歸さばやと曰ふ所に裏の門より最明寺殿旅に瘦れし御有様、御臺是はと驚ろさ給ひ扱は坐禪の御出のや目出度上の目出たさよと悦び給へば、若君も立出て御對面こそ賑はしけれ我此度坐禪禁足と偽り誠は廻國行脚して民の安危と窺ひし、其隙間と見て冠者めが惡逆天の責め目前たり又天女九が、武功未頼しく北の方の精進ひ彼是以て入道が妻子ぞや

と御悦びは限りなし、扱此諸軍勢の中に横縫のちぎれたる腹巻して鎗長刀を持ち、瘦たる馬に女房の口取たる武者一騎あるべし夫婦共に召連來れと御説ければ、佐々木が娘承たまはり頼て御門に立出る大勢とは云ながら、花紅葉と出立なる見紛ふべくも有らばこそ、つろくと立寄て、是々上意なるを男女ともに御前へ罷り出られよ、經世驚るさ、何と某夫婦御前へ召るゝとやあら思ひ寄すや人違へにても候の、今一度御伺ひ有るべうもやと有ければ、イヤ〜如何にも見苦しき出立の武者一騎女房に瘦馬引せたる者あるべし召連れ參れとの御説の上は、左様の者は外になし早く參られ候べし、何が扱この上は違背申さん様はなし、實に〜女房某が敵また議奏申上召出されて頭と劔られん爲と覺わたり如何あらんと云ければ、チ、よし〜夫も力なし假令夫婦が御前にて生首と打るゝとも、一度鎌倉殿拜し奉まつる悦び一念は潔く親の敵讎人と三日が内に取殺し、此世の妄執はらすべしいざ〜せ給へと打笑ひ、大床差て見渡せば今度の早打り上り集まる兵さう星の如く並居たり、扱御前への諸侍士其外数人並居つゝ、目と引き指し指し笑ひあへる其中に、横縫のちぎれたる古腹巻に鎗長刀女房にのたげさせ、戦慄たる氣色もなく參りて御前に畏

まる、ヤア〜あれなるは佐野の源左衛門經世も、如何に女房是こそ何時ぞやの大雪に宿借し修行者よ、見忘れて有るゝ其夜の情忘れがたく召出して有つるはと曰へば、夫婦の者長刀のらりと投捨てあつと計りに頭と下げ感涙袖とぞ浸しける重ねて仰せ出さるゝは、汝が叔父源藤太經景父政經と討て剩さへ累世の知行と押領したる罪科紛れなく、我安房の國と廻りし時彼の者落人と成て隠れしと房州の探題に申付け成敗と遂させたりと、御言葉の下よりも獻舎の雜式首桶もつて經世が前に差置たり、經世餘りの有難さ蓋と探ば源藤太が首なりけり、這は辱じけなき御高恩冥土の父が悦び現世の我等が本望何時の世に何と持て此御恩と報せんと手と合せ涙と流し大床に額と附け仰ぎ居ること道理なれ、尙々仰せ出さるゝ旨あり近よ參れと御隣近く召れ、いで汝佐野にて女房が申せしよな今にてもあれ鎌倉に御大事あるとならば、ちぎれたりとも其具足と探て投懸け鎗たりとも其長刀と持ち瘦たりともあの馬に乗り、一番に走參るべきよし申つる言葉の末と違へずして參たるこそ神妙なれ、先々沙汰の始めには經世が本領佐野の庄三十餘郷返し與ふる所なり、又た何よりも切なりしは大雪降て寒ありしと女房が情に秘藏せし鉢の木と切り火に焚き暖たりし心志と

●近松時代物傑作淨瑠璃既刊書目

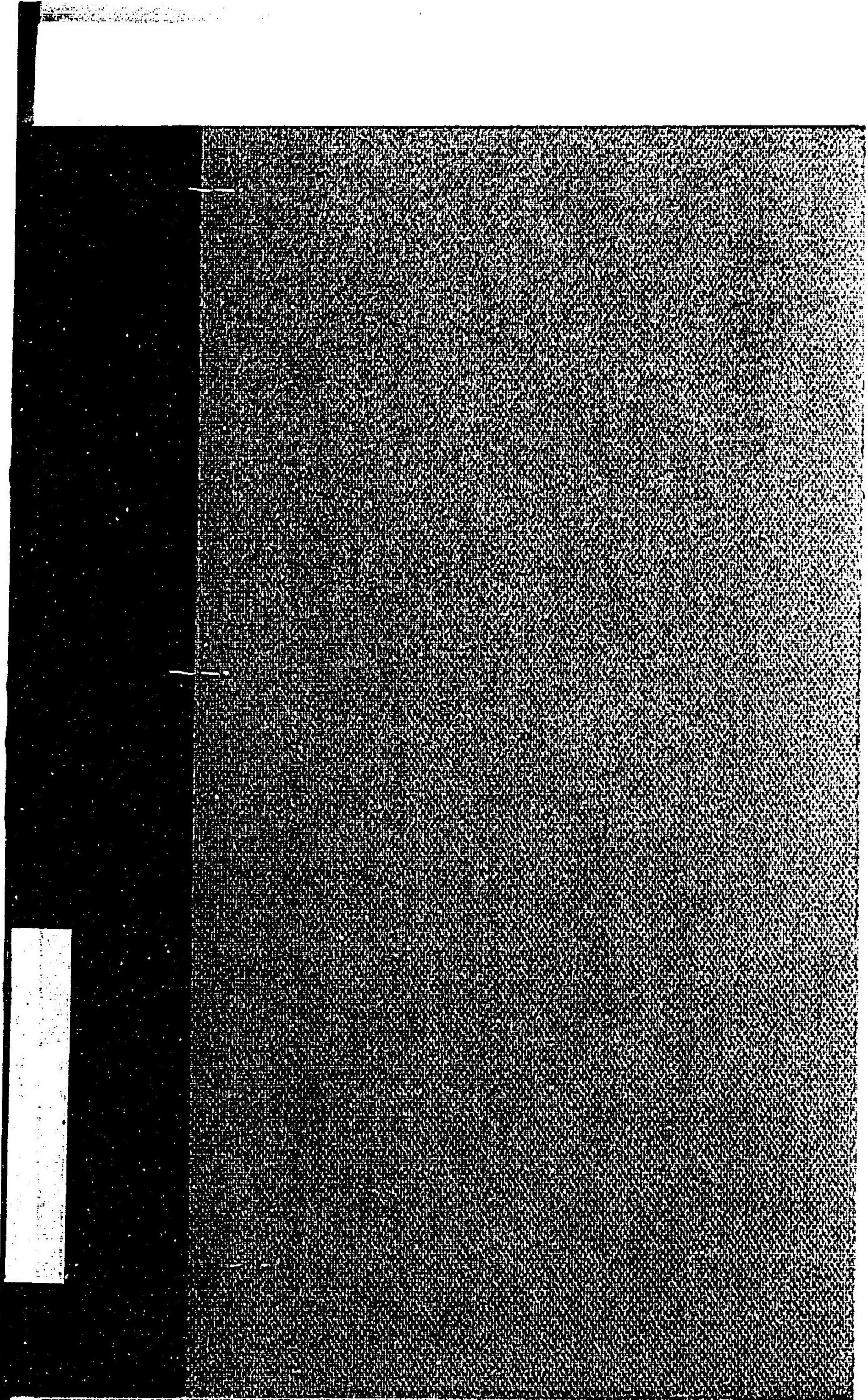
- | | | |
|----------------------------|---------------------------|----------------------------|
| 一世 繼 曾 我 | 一雪女五枚羽子板 | 一國性爺合戰 |
| 一出 世 景 清 | 一傾城反魂香 | 一日本振袖始 <small>三版近刊</small> |
| 一天 智 天 皇 | 一遊君三世相 <small>合卷近</small> | 一曾我會稽山 |
| 一十 二 段 | 一碁盤太平記 <small>日出版</small> | 一傾城酒吞童子 |
| 一最明寺殿百人上臈 | 一百合若野守鏡 | 一本朝三國誌 |
| 一百 日 曾 我 | 一吉野都女楠 | 一雙生隅田川 |
| 一源氏烏帽子折 <small>合卷三</small> | 一嫗 山 姥 | 一信州川中島合戰 |
| 一輝 九版發賣 | 一天 神 記 | 一關八州繫馬 |

●諸名家傑作戲曲小說類

- | | | | | | |
|-----------|-------|-----|----------|----|-------|
| 太平記
綱目 | 大塔宮曦鎧 | 全一冊 | 近松門左衛門添刪 | 三版 | 定價金八錢 |
| | | | 竹田出雲椽 | 近刻 | 郵税金二錢 |
| | | | 松田和吉 | | |
| | | | 合作 | | |

10

21K-26



最明寺殿百人上臈

国立国会図書館

912.4

Ti238s3

088240-000-5

912.4-Ti238s3

最明寺殿百人上臈

近松 門左衛門 / 著

M26

DBI-0063

